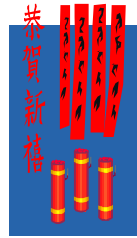


武田節



鹿兒島に戻り、郷土史研究会などで地域の歴史をあれこれ調べていて、このあたりの人々が郷土の歴史を殆ど知らないことに驚いた。ところが私自身も振り返ってみれば、自分の郷里について何を知っているか、あまり大きなことは言えないことに気がついた。

私は信州諏訪の出身である。三百メートルほど先の貞松院にある松平忠輝の墓や、その先の正願寺にある芭蕉の供をした曾良の墓などを訪れたのは、結婚してから夫を案内したときが初めてであった。

郷土の歴史は、小学五年生の頃茅野との中間にある上原城址に登って、老教師から武田勢が攻めて来た折の話聞いた位のことであった。そして武田信玄といえば、我が諏訪を侵略席卷し、姫を我が物にしたという征服者のイメージであった。信玄が諏訪

大社を信仰してあまたの寄進をしていたことも、跡継ぎの勝頼が諏訪御前の子であり、信玄の屍が諏訪の湖に沈んでいるであろうことも、その思いを変えらるまでには至っていないかった。

高校では地歴部に所属した。不思議なことに諏訪藩の歴史など調べたことは無かった。古い甲州街道の宿場の見学や豊富な縄文時代の遺跡の見学には行った。我が町内に考古学の草分けの藤森栄一氏が住んでいらして、土器などの話をして頂いたことがあったが、山城を調べたことも無ければ、今は有名になった信玄の棒道など遠くないのに存在も知らなかった。ということとは日本国中例外なく郷土史の勉強は欠けていて、これは戦後の、いや維新後の教育政策の結果なのだろうかと思うことである。

高校卒業後進学のため上京して以来、私はずっと東京住まいであった。三十五歳の時、初めて会社に勤めることになった。子供たちの学費や生活費の補助のためである。仕事はまだ実用化されたばかりの電算機のソフトを作ることだった。好奇心のある私

は、コンピュータというものに興味津々で、一年間専門学校に通っていたのだ。まだ創作の喜びの味わかる時代で夢中になった。そして技術者として一般の人よりも高給を頂いていた。

会社は、中央線の豊田にある大手の電機工場で、山梨県にも近いのでそこからの通勤者も多かった。それで会社の宴会などではよく武田節が歌われた。しかし私の中には何か抵抗するものがあって、皆と唱和することもなかった。

勤勉で質朴な仲間とも別れ、その工場を去ってもう十二年になる。ここ入来町に住んでからも六年が経った。五年前、現天台座主渡辺恵進猥下の筆になる「鎮魂碑」を護国神社境内に建立したとき建立委員会会長をお願いした縁で、軍恩会長久留主長利さんの催しに参加させて頂いている。今年の忘年会も先日行われた。

軍恩会というのは、太平洋戦争に従軍したことに對する年金、いわゆる恩給を支給されている人々と、その遺族の集まりである。戦友の多くが戦死した中

九死に一生を得た幸運な方々である。もう皆さんが高齢で、残された奥さんの人数の方が多くなっているらしい。今年は一人も欠けることなく年末を迎えることが出来たよつで何よりであった。

会長は優秀な元海軍の軍人で、マイクロバスの運転手に指示しながら、会場のいむた温泉の旅館まで一人一人を軒先まで迎えて集めて行く。町の北から始まって三四番目に私たちが乗るので、それから後しか分からないが多くの人が山袈の奥に住んでいて農業に携わっている。こんなところにも道があるのだと感心するくらい辺鄙な所もある。ご主人亡きあと山の中で一人で生活している婦人も何人かいるらしい。

こうしてこの小さい町を、一時間以上もかかって二十八名を集め温泉宿に着いたのは、正午を回った頃だった。温泉を楽しんだのは夫一人で、やがて宴会が始まった。

山林を開拓して来たという無口な元軍人の夫妻は、一日蕎麦を打って腕が痛むと微笑んだ。今年は出来

が悪く、二儀しか採れなかったという。こうしてひっそりと働いている人々は少しも卑しさが無く、古武士の面影さえ感じられる。「みんないい顔をしている」と夫もつぶやく。物欲の世となつてしまつた今こうした人々は本当に貴重な存在である。宴も盛り上がつて来た。去年は遠慮していたが、今年は私が夫にカラオケのリクエストを何曲か出した。歌の間に宿の女衆の踊りや太鼓も入つた。なかなか達者な人達である。戦後の苦勞を重ねて来たこの方々に、私も何か歌をプレゼントしようと思つた。ただし演歌は歌つたことのない私である。大体音楽大学を出た娘に「ママは音痴だからゆめ歌うんじやありません」と固く禁じられて来た。ただ気持ちが高揚していた。

「そつだ、武田節にしよう」

と思つた。鹿児島から見れば、信濃も甲斐も同じよつなものだ。カラオケの案内の本を見るとちゃんと載つていた。画面に「武田節」と出たのでマイクを持って壇に立つた。もともとの音痴が治つている

訳はないので、出だしの音程がちょっと取れなかつたが、心を籠めて一生懸命歌つた。詩吟の部分も一本調子ながら声を張り上げた。

「雲と起これや武田武士、武田武士」

懐かしさもこみ上げる。夫も私のこの歌は初めて聞いた筈である。そもそも初めて歌つたのだから。二十世紀最後の忘年会。きつと忘れられない会となるだろう。そして希望も雲とモリモリ起こつてほしいものである。

